リチヤアド・バアトン訳「一千一夜物語」に就いて

芥川龍之介

一

リチヤアド・バアトン（Richard Burton）の訳した「一千一夜物語」――アラビヤン・ナイツは、今日まで出てゐる英訳中で先づ一番完全に近いものであるとせられてゐる。勿論、バアトン以前に出た訳本も数あつて、一々挙げる遑も無い程であるが、先づ「一千一夜物語」を欧羅巴に紹介した最初の訳本は一七〇四年に出たアントアン・ガラン（Antoine Galland）教授の仏訳本である。これは勿論完訳ではない。ただ甚だ愛誦するに足る抄訳本と云ふ位のものである。ガラン以後

にも手近い所でフオスタア（Foster）だとかブツセイ（Bussey）だとかいろいろ訳本の無い訣（わけ）ではない。併し何（いづ）れも訳語や文体は仏蘭西（フランス）臭味を漂（ただよ）はせた、まづ少年読物と云ふ水準を越えないものばかりである。

ガラン教授から一世紀の後（のち）――即ち一八〇〇年以後の主（おも）なる訳者を列挙して見ると、大体下（しも）の通りである。

1. Dr. Jonathan Scott. (1800)
2. Edward Wortley. (1811)
3. Henry Torrens. (1838)
4. Edward William Lane. (1839)
5. John Pane. (1885)

トレンズの訳本は、在来のもののやうに英仏臭味を帯びないもので、其の点では一歩を進めたものであるが、訳者が十分原語に通暁してゐなかつたし、殊に埃及やシリヤの方言などを全く知らなかつた為に、憾むらくは所期の点に達し得なかつた。而も十分の一位で中絶して居るのは、甚だ惜むべきことである。

レエンの訳本――日本へは最も広く流布してゐる。殊にボオン（Bohn）叢書の二巻ものは、本郷や神田の古本屋でよく見受けられる――は底本としたバラク（Bulak）版が元々省略の多いものであり、其の上に二百ある話の中から半分の百だけを訳出したもので、

随(したが)って残りの百話の中に却(かへ)って面白いものが有ると云ふやうな訣(わけ)で、お上品に出来過ぎて了(しま)つて、応接間向きの趣向(しゆかう)は好(よ)いとしても、慊(あきた)らないこと夥(おびただ)しい。お負けに、レエンは一夜(いちや)一夜(いちや)を章別にした上に、或章は註の中(うち)に追入れて了(しま)つたり、詩を散文に訳出したり又は全然捨てて了つたりして居るし、児戯(じぎ)に類する誤訳も甚だ多いと云ふ次第。

次にペエン——フランソア・ヴイヨン（François Vilon）の詩を英訳した——の「一千一夜物語」の訳は、旧来のものに比べると格段に優(すぐ)れてゐる。話の数(かず)もガラン訳の四倍あり其の他のものの三倍はあるが、手の

届かぬ所が無いでもない。しかし兎も角好訳であるが、私版を五百部刊行しただけで、遂に稀覯書の中に這入つて了つた。ただ一つ特記すべきことは、巻頭にバアトンへの献詞が附いてゐることである。

バアトンの訳本も、一千部の限定出版で、容易に手に入り難い。出版当時十ポンドであつたものが、今日では三十ポンド内外の市価を唱へられてゐるのは、「一千一夜物語」愛好者の為に聊か気の毒である。尤も此のバアトン訳の剽竊版（Pirate Edition）が亜米利加で幾つも出来てゐるが、中身は何うだらうか。

バアトンの訳本の表題は左の通り。

A PLAIN AND LITERAL TRANSLATION OF
THE ARABIAN NIGHTS ENTERTAINMENTS,
NOW ENTITLED THE BOOK OF THE
THOUSAND NIGHTS AND A NIGHT WITH
INTRODUCTION EXPLANATORY NOTES ON
THE MANNERS AND CUSTOMS OF
MOSLEM MEN AND A TERMINAL ESSAY
UPON THE HISTORY OF THE NIGHTS BY
RICHARD F. BURTON.

巻数は補遺共十八冊で、出版所はバアトン倶楽部（クラブ）、一八八五年から一八八八年へかけて刊行されてゐる。

訳者バアトン並びにバアトン訳本の次第は次々に話すことにしませう。

二

訳者バアトンは東方諸国を跋渉(ばつせう)した英吉利(イギリス)の陸軍大尉であるが、本の方を中心にしてお話すると、バアトンの訳本の成立ちは、第一巻の「訳者の序言」と第十一巻の「一千一夜(いちせんいちや)物語の伝記並に其の批評者の批評」とに収められて居る。

抑(そもそ)もバアトンが此(こ)の翻訳を思ひ立つたのは、アデ

ン在留の医師ジョン・スタインホイザアと一緒《いつしよ》に、メヂヤ、メツカを旅行した時のことで、バアトンが第一巻を此のスタインホイザアに献《けん》じてゐるのを以て視《み》ても、二人《ふたり》の道中話《だうちうばなし》がどんなであつたかは分る。

其の旅行は一八五二年の冬のことで、其の途中で、バアトンはスタインホイザアと亜剌比亜《アラビア》［＃「亜剌比亜」は底本では「亜剌比亜」］のことをいろいろ話してゐる中《うち》に、おのづと話題が「一千一夜物語」に移つて行つて、とうとう二人《ふたり》の口から、「一千一夜物語」は子供の間《あひだ》に知れ渡つてゐるにも拘《かか》はらず本当の値打が僅かに亜剌比亜《アラビア》［＃「亜剌比亜」は底本では「亜剌比亜」］語学者

にしか認められてゐないと云ふ感慨が洩(も)れて出た。それから話が一歩進んで、何(ど)うしても完全な翻訳が出したいと云ふことに纏(まと)まり、スタインホイザアが散文を、バアトンが韻文(いんぶん)を訳出する筈に決して、別れた。

それから両人は互に文通して、励まし合つてゐたが、幾(いくばく)も無くスタインホイザアが瑞西(スイス)のベルンで卒中(そつちう)で斃(たふ)れて了(しま)つた。スタインホイザアの稿本は散逸(さんいつ)して、バアトンの手に入(はひ)つたものは僅かであつた。

その後バアトンは、西部亜弗利加(アフリカ)や南亜米利加(アメリカ)に客寓中(かくぐうちう)、独り稿を継(つ)いで行つた。其の間(かん)に於ける彼の胸中は、「他人目(たにんめ)には何(ど)うか知らないけれども、自分で

は何よりの慰藉と満足との泉であつた」と云ふ彼自身の言葉が尽して居る。

斯くて稿を畢つて、一八七九年の春から清書に取掛つて行つたが、一八八二年の冬、或雑誌に、ジョン・ペインの訳本が刊行されると云ふ予告が出た。バアトンが之を知つたのは、恰も西部亜弗利加の黄金海岸へ遠征しようと云ふ間際であつた。乃でペインに「小生も貴君と同様の事業を企て居り候へども、貴君の既に之を完成されたるは結構千万の儀にて、先鞭の功は小生よりお譲り可申云々」と云ふ手紙を送つた。その中にペインの訳本が出た。で、バアトンは一時中

止した。

バアトンが又続けて言つて居る。「東部亜弗利加(アフリカ)のゼイラに二箇月間滞在してゐた時にも、ソマリイを横断の陣中でも、此の「一千一夜(いちせんいちや)」が何(ど)の位自分を慰めて呉れたか解(わか)らない」と。

然らば此のバアトンの訳本は、欧洲の天地を遠く離れて、而も瘴煙蛮雨(しやうえんばんう)の中で生れたもので、恰(あたか)もタイチに赴いたゴオガンの絵と好対照である。

一八八四年に、バアトンはトリエストに滞在中、最初の二巻を脱稿した。

茲(ここ)で問題は印刷部数である。或学者が曰ふ、「百五

十部乃至二百五十部で宣(よろ)しからう」と。其の学者と謂(い)ふのは、本文(ほんもん)を十六万部も刷(す)つて、六シルリングの廉価本(れんかぼん)より五十ギニイの高価本まで売り尽した男である。又或出版業者は「五百部がよい」と云つた。ただ素人(しろうと)の一友人が「二千から三千がよい」と勧めた。バアトンも迷つた末、一千部に決(き)めた。

バアトンはそれから知人未知人を問はず、買ふらしい人の表を作つて、広告を配(くば)つた。其の要綱は、全十冊、一冊一ギニイ、各冊とも代金は本と引換へのこと、廉価版は発行しない。一千部限り印行、十八箇月内に完結の予定、と云ふ規定であつた。広告配布数は二万

四千で、その費用は百二十六ポンド掛(かか)つた。返事の来たのは八百通。

　翌年バアトンは英国に帰つて着々と事を進めてゐると、八百の予約はとうとう二千に殖(ふ)えた。中には「差当り第一巻を見本として送られ度(たく)、気に入り候はば引続いて願上候」といふ素見客(ひやかしきやく)もあつた。

　之に送つたバアトンの返事は、「先づ十ギニイ送金有之度(これありたく)、その上にて一冊御申込になるとも全十冊御申込になるとも御(ご)勝手に候」と。其れから取次業者連中は、安く踏倒(ふみたふ)さうと思つて種々画策(くわくさく)をやつた。又、本を受取つても金を払はない連中も廿人位あつた。

バアトンは最初から取次業者を眼中に置かず、危険を冒して自分で刊行しようと企てたのである。知名の文学者なり又文学団体の協賛を希望したけれども、誰れ一人応じなかつた。バアトンの計画を嘲笑した「印刷タイムス」の如きもあつた。「バ氏の此の事業に関係して居る筈の某々の氏名が訳本に載つて居らぬ。印刷者の手落ちならば正に罰金を課すべきである。又「一千一夜物語」の完訳は風俗上許し難い。縦令ひ私版であるとしても、公衆道徳を傷ける虞ある以上はバ氏に罰金を課するが至当だ」と云ふやうな調子であつた。バアトンは此の挑戦に応じて「出版者は著者

自身である。斯かる類(たぐひ)の書を出版業者の手に移すことは不快の至りで、著者自身の手に依つて、東洋語学者並びに考古学者の為に出版するのである」と発表した。

三

バアトンの「一千一夜(いつせんいちや)物語」十七巻の中、七巻は補遺(ほゐ)である。その第十巻の終りに Terminal Essay が附いてゐて、此の物語の起源、亜剌比亜(アラビア)［#「亜剌比亜」は底本では「亜剌比亜」］の風俗(ふうぞく)、欧羅巴(ヨオロツパ)に於ける訳本等

が精しく討究されてゐる。殊に亜刺比亜並びに東方諸国の風俗に関する論文は、学術上の貴い研究資料であると共に、専門家ならぬ者にも頗る興趣あるものである。

バアトンは本文を、一話一話に分けないで、原文通り一夜一夜に別けてゐる。又、韻文は散文とせずに韻文に訳出してゐる。之を以て観てもバアトンが如何に原文に忠実であつたかは推察出来ると思ふ。

例へば、亜刺比亜人の形容を其儘翻訳して居るのに非常に面白いものがある。男女の抱擁を「釦が釦の孔に嵌まるやうに一緒になつた」と叙してある如き其

の一つである。又、バクダッドの宮室庭園を写した文章の如きは、微に入り細を穿つて居つて、光景見るが如きものがある。第三十六夜（第二巻）の話にあるHarunal-Rashid の庭園の描写などは其の好例である。

バアトンは又基督教的道徳に煩はされずして、大胆率直に東洋的享楽主義を是認した人で、随つて其の訳本も在来の英訳「一千一夜物語」とは甚だ趣を異にしてゐる。例へば、第二百十五夜（第三巻）にBudur 女王の歌ふ詩に次の如きものがある。

The penis smooth and round was made with
anus best to match it,

Had it been made for cunnus' sake it had been
formed like hatchet!

併し概して言ふと、下がかつた事も、原文が無邪気に堂々と言ひ放つてゐるのを其儘訳出してあるから、近代の小説中に現はれる Love scene よりも婬褻の感を与へない。

脚註が亦頗る細密なるものである。而も其の註が尋常一様のものでなく、バアトン一流のものである。単に語句の上のみでなく、事実上の研究にも及んでゐる。例へば Shahriyar 王の妃が黒人の男を情夫にする条の註を見ると、亜剌比亜の女が好んで黒人の男

子を迎へるのは他ではない。亜剌比亜人の penis は欧羅巴人のよりも短い。然るに黒人のは欧羅巴人のよりも更に長く、且つ黒人のは 膨脹律 が少なくて duration が長い。其の為めに亜剌比亜女が黒人を情夫に持つのであるといふ 類 である。現にバアトンが計測した黒人の penis は平均長さ何 吋 だ抔と註してある。（未完）

（大正十三年七月）

〔談話〕

底本：「筑摩全集類聚　芥川龍之介全集第四巻」筑摩書房
　　1971（昭和46）年6月5日初版第1刷発行
　　1979（昭和54）年4月10日初版第11刷発行
入力：土屋隆
校正：松永正敏
2007年6月26日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。